第九節　久松切の位置

一

久松切は伊予国（現在の愛媛県）松山の藩主久松家に伝来したことによりその名がある。もとは巻上・下、二軸の巻子本であった。しかし、巻上は裁断され、諸家に分蔵されており、巻下は完本の状態で出光美術館に所蔵されている。[1]

巻下の巻末には室町時代の添状が貼付されており、藤原行成（九七二―一〇二七）筆と極められているが、実際の書写年代は、やや下り、「十二世紀はじめの書写」[2]と推定されている。「字形は大体整斉にして平明であり、線は温和」[3]な書で、縦二六・三㎝ほどの料紙には藍・紫色の飛雲文様の紙、斐紙、藍色の雲形を漉き込んだ雲紙、雲紙に飛雲文様を併用した紙などが用いられている。いずれにも金銀の砂子が撒かれており、[4]料紙の装飾性の高さから久松切が美術品として珍重されたことが窺える。

堀部正二氏[5]は、平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本を、主に本文の近似関係より、次のごとく三大別された。

(1)御物傳行成筆粘葉装本の系統に近きもの…粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切

(2)關戸家藏傳行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの…雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本

(3)いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも稱すべきもの

しかし、久松切に関する記述は見当たらない。

一方、久曽神昇氏は、主に形態的な面から、右のうちの(2)雲紙本・関戸本を「初稿本」、(2)巻子本・葦手本、及び本稿で取り上げる久松切を「再稿本」、(1)粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた。[6]

この度、久松切巻下については出光美術館所蔵の原本を調査させて頂いた。それに加え、原姿に近い状態（巻上・下、二軸）の複製本、[7]及び『古筆学大成』第一三巻に拠り調査を行ったデータに基づき、改めて諸伝本間における久松切の位置付けを

試みる。

二

久松切に収められている詩歌句を『新編国歌大観』の番号に拠り、排列し直すと次の通りとなる。

1～128・133～135・137～139・157～193・195～396	【上巻】
397～515・517～677・679～796の次[8]・797～804	【下巻】

まず、右に存しない詩歌句などについて述べる。

複製本では、128の次行には157が排列されているが、128と157の間には紙継ぎの跡が認められる。この128と157の間に位置する129～156のうち、133～135の三首（一葉）[9]、及び、137～139の三首（一葉）は、断簡として『古筆学大成』に所収されている。従って、129～156の部分は、複製本の製作時点では既に切断されていたということが知られる。また、129～132・136・140～156の二二首については散逸しており、現在では所在不明である。また、516については、書写者が書き落としたとも考えられるが、515と517の間に紙継ぎの跡が認められるので、516の一首も切り取られ[10]、断簡として散逸した可能性もあり、その点については判断し得ない。

また、194については、193と195の間には紙継ぎの跡は見られず、欠落かと思われる。その194の位置（193と195との間〈行間〉）には、194の詩句が、別筆[11]にて、一行書きで補筆されている。その他、この194と同様な補筆が、433と434との間・677と679との間（678の位置）にも認められる。その193と195との間（194の位置）に存する補筆を①とし、433と434との間に存する補筆を②とし、677と679との間（678の位置）に存する補筆を③として示すと次の通りである。②・③は、『和漢朗詠集』の撰者である公任の原撰本には無い「後人の加筆[12]」とされている詩歌句である。

①鳥下緑蕪秦譜寂蟬鳴黄葉漢宮秋　許渾

②ヨニフレハコトノハシケキクレタケノウキフシコトニウクヒスソナク
③周公旦者文王之子武王之弟也自知其貴忠仁公者皇帝之祖皇后之父也世推其仁

右の三首（①・②・③）を除くと、今回調査し得た久松切の詩歌句は、都合七八〇首となる。

以下、久松切の所在不明の二二首（129～132・136・140～156）、及び散逸の可能性も考えられる516については考察の対象外とする。また、諸伝本における散逸と思われる箇所についても対象外とする。

三

本考察の対象とする範囲内において、平安時代書写とされる諸伝本全ての詩歌句を合わせると七九一首であり、そのうち、詩歌句の有無の異同には九八か所が挙げられる（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

久松切に無い詩歌句は一一首（「92の次」・194・「344の次」・「376の次」・「422の次」・「434の次」・「652の次」・678・「735の次」・「736の次」・「803の次」）である。「434の次」は、他本では434の次に位置するが、久松切では、既述のごとく、433と434との間に存する、「後人の加筆」とされた和歌である。

また、「92の次」・「344の次」・「376の次」・「422の次」・「652の次」・678・「735の次」・「736の次」・「803の次」も、「434の次」と同様、「後人の加筆」であると思われる。「後人の加筆」とされた詩歌句を除くと、久松切に無いのは194のみである。

よって、久松切では、十一世紀中葉の書写と推定されている粘葉本類に無い詩句（322）、及び雲紙本類に無い詩歌句（42・215・268・321・354・380・449・534・564・603・712・714・729・784・797）を全て有しており、詩歌句数については集成的であるといえる。

四

排列について検討を行う。

諸伝本間において、ある伝本の排列が他本と異なる箇所を全て挙げると三六か所である。そのうちの一四か所[13]において久松切一本が他の諸伝本と異なっている。そこから久松切は極めて独自性の強い形態を有していることが知られるのである。

また、久松切独自の排列の揺れている箇所、及びその前後の箇所においては、雲紙本に無い詩句が四か所（五首〈268・615・618・629・756〉）もみられる。その点は注目される。

次に、その箇所を詩歌番号で挙げ、以下、異同を示し、括弧内には諸伝本の略号を示す。

①
268・270・271・269（久）
[268無]・269・270・271（[雲]・[関]）
268・269・270・271（粘・伊・戊・葦）
268・269・270・[271無]（[巻]）
269・270・271・268（山）
269・270・271（多）

②
615・618・619・620・621・622・616・617（久）
[615無]・616・617・[618無]・619・620・621・622（[雲]）
615・616・617・618・619・620・621・622（関・粘・伊・戊・葦）
616・617・618（法）
615・616・617無[617無]・618・619・620・[621無]・622（安・[巻]）
615・616・617・618・619後部・620・621・622・619前部（山）

615・616・617（唐1・下）
619・620（多）
③628・629・626・627（久）
626・627・628・629無（雲）
626・627・628・629（関・粘・近・伊・巻・山・戊・葦）
626／627[14]・628・629（多）
④755・756・754（久）
754・755・756無（雲）
754・755・756（関・粘・近・伊・安・巻・太・山・戊・葦）

右の事例に拠ると、久松切独自の排列の揺れている箇所には、雲紙本類に無い詩歌句（雲紙本①・②・③・④、関戸本①、巻子本①・②）が存することが確認される。

本書（第三章）中、著者は、山城切独自の排列の揺れている箇所に雲紙本類に無い詩歌句が目立つことを指摘し、「転写の際、雲紙本類に無い詩歌句が、例えば、異本注記のような形で（欄外などにも）書き込まれるなどして、その部分がいつしか本文化されて排列に揺れが生ずるごとき形に変移していったのではなかろうか」と推測した。また、本書中、巻子本のところでも同様なことを述べた。

山城切・巻子本における事例を踏まえると久松切においても「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」には相関性があり、久松切の親本は雲紙本類と何らかの関係性があった可能性が想像されるのである。

また、粘葉本類・雲紙本類の形態を特徴づけているともいえる、巻上・春部巻末の三詩歌群「躑躅」・「款冬」・「藤」の順序について、久松切では断簡[16]となっており、「款冬」の部分は散逸のため不明であるが、巻頭の内題の次に存する部類名・

題の一覧によると、雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順である。

久松切は排列の面において独自性が強いことが確認された。大きくは雲紙本類の系譜上に位置すると考えられるが、雲紙本類に無い詩歌句も多く有している。以上の考察結果を考え合わせてみると、久松切の形態上の原形は雲紙本類に類するものであり、それが粘葉本類などによって補われた結果、当該の形態となったとみてよいのではなかろうか。

五

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を％で表した。

同表に拠ると、取り分け久松切と近しい関係にあると思われる伝本は見当たらない。特に和歌は、いずれの伝本とも殆ど偏りがなく、他の諸伝本間における数値に比して久松切ではいずれの伝本ともさほど遠くはない関係にあるということが看取される。それは、久松切の和歌の独自本文が僅か六か所のみであるということからも首肯される。

そのような中、久松切と諸伝本との本文関係の概要については、久松切と同文率の高い伝本は、和歌では、近衛本（八一・九％）、伊予切（八一・七％）、法輪寺切（八〇・六％）、粘葉本（七九・七％）、漢詩は、戊辰切（八四・〇％）、粘葉本（八三・七％）、法輪寺切（八二・八％）、近衛本（八二・六％）、伊予切（八二・二％）が挙げられる。それらに比べると、雲紙本・

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	巻子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌／詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	巻子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

関戸本・巻子本・葦手本などとはやや低い同文率であることが知られる。すなわち、久松切の本文が雲紙本類とよりも粘葉本類と近いということを示している。そこで、まず、久松切と粘葉本類との関係をみることによって久松切の本文について考察を行いたい。

久松切が粘葉本類とのみ一致する事例を挙げると次のごとくである。久松切の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、異同も載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。また、各項目の末尾には他文献も載せる。

①451わかのうらにしほみちくらしかたをなみあしへをさしてたつなきわたる（久）

〈同〉 しほみちくらし（粘・近・伊）

〈異〉 しほみちくれは（雲・関・巻・大内・山・多・戊・葦）

＊『万葉集』451・『赤人集』（Ⅰ115・Ⅰ352・Ⅱ233）・『古今六帖』[17]第六810・『金玉集』48、「しほみちくれは」。

②461わひしらにましこなゝきそあしひきのやまのかひある今日にやはあらぬ（久）

〈同〉 ましこなゝきそ（粘・伊）

〈異〉 ましはなゝきそ（雲・関・巻・多・戊・葦）

ましらなゝきそ（近）

ましこはなゝきそ（山）

＊『古今集』1067・『躬恒集』（Ⅰ44・Ⅲ205・Ⅴ65）・『古今六帖』第二101、「ましらななきそ」。

③538きみなくてけふりたえにしゝほかまのうらさひしくもなりにけるかな（久）

〈同〉 なりにけるかな（粘・近・法・伊）

〈異〉 みえわたるかな（雲・関・巻・太・下・山・多・戊・葦）

＊『古今集』852・『貫之集』Ⅰ747・『古今六帖』第四527・『三十六人撰』[18]、「見え渡るかな」。

このうち、①は、他文献では全て「しほみちくれは」とあり、久松切・粘葉本類の「しほみちくらし」は一般的ではなく、改変あるいは改訂された本文であると思われる。また、②は、他文献では近衛本と同様、「ましらなゝきそ」とある。近衛本の「ましら」と、久松切・粘葉本類の「ましこ」は、「猿」をいう雅語で、『古今集』では、「ましら」が大勢を占めている。[19] また、③においても、②の場合と同様、他文献では、久松切・粘葉本類の「なりにけるかな」に対していずれも「みえわたるかな」とあり、久松切・粘葉本類は改変された本文であると思われる。以上の用例においては、久松切では、粘葉本類の本文を継承したと看做すのが穏当であろうと思われる。このように、久松切は、粘葉本類に近い本文を共有しているが、次の用例のごとく、雲紙本類の本文をも有している。

久松切の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、異同も載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

◆381 (1)こゝにわか　(2)めつらしくみるはつゆきをよしのゝやまにふりやしぬらん（久）

(1)〈同〉こゝにわか（雲・関・巻・山・葦）

〈異〉みやこには（粘・伊・戊）

(2)〈同〉めつらしくみる（雲・関・巻・戊・葦）

〈異〉めつらしとみる（粘・伊）

めつらしくみゆる（山）

『拾遺抄』147・『拾遺集』243に見られる。『拾遺抄』[20]では、「流布本系統」の、島根大学図書館本などは、粘葉本と同じく「みやこには」「めつらしとみる」とし、「異本A系統」の宮内庁書陵部本、「異本B系統」の静嘉堂文庫所蔵貞和三年奥書本は「みやこにて」「めつらしくみる」とする。また、『拾遺集』諸伝本[21]では「みやこにて」「めつらしと見る」とあり、久松切・雲紙本類のように初句を「こゝにわか」とする本文は見当たらない。当該箇所において久松切は雲紙本類の本文を受継いだものと思われる。

以上のごとく、久松切では、十一世紀中葉の書写とされる粘葉本・雲紙本両類の本文を有しているが、久松切と同時代の十二世紀書写本との関係も注目される。以下、十二世紀書写とされる諸伝本と久松切との同文例を挙げる。久松切の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本との異同を載せる。各項目の末尾には他文献の本文も載せる。

①44三千とせになるといふもゝのことしよりはなさくはるにあひにけるかな（久）

〈同〉あひにけるかな（巻・山）

〈異〉あひそめにけり（雲・関・粘・伊・葦）

あひそしにける（多）

あふそうれしき（戊）

＊『拾遺集』288、「なりそしにける」。『古今六帖』第一58、「なりそしにける」。『忠岑集』150、「あひそしにける」。『是則集』6、「あひにけるかな」。

②50留春ゝ不駐春歸人寂寞厭風不定風起花蕭索（久）

〈同〉駐（戊・葦）

〈異〉住（雲・関・粘・伊・巻・山）

＊『白氏文集』[22]巻五十一「落花」、「住」。

③59今年閏在春三月剰看金陵一月花（久）

〈同〉看（巻）

〈異〉見（雲・関・粘・伊・戊・葦）

=見（山）

④219ひとゝせにひとよとおもへとたなはたのあひみるあきのかきりなきかな（久）

〔同〕あひみる秋の（戊・葦）
　　あひみるあきの（下）
〔異〕あひみむあきの（雲・関・粘・伊・巻・山・多）
＊『拾遺集』150・『貫之集』Ⅰ395、「あひ見む秋の」。『古今六帖』第一154、「あひ見る秋の」。
⑤379立於庭上頭為鶴居|在爐邊手不龜（久）
〔同〕居（下）[23]
〔異〕座（雲・関・粘・伊・山・戊・葦）
　　生（巻）
＊『菅家文草』[24]巻四「客居對雪」、「居」。
⑥463第一第二絃ゝ索秋風拂松疎韻落第三第四絃冷夜鶴憶子籠中鳴第五絃聲最|掩抑瀧水凍咽流不得（久）
〔同〕最（巻）
〔異〕尤（雲・関・粘・近・法・伊・太・山・戊・葦）
＊『白氏文集』巻三「五絃彈」、「最」。
⑦510邊城之牧馬頻|嘶平沙眇ゝ江行路之征帆盡去遠岸蒼（久）
〔同〕頻（戊）
〔異〕連（雲・関・粘・近・法・伊・巻・山・葦）
⑧511洲芳杜若抽心長沙暖鴛鴦鋪|翅眠（久）
〔同〕鋪（山）
〔異〕敷（雲・関・粘・近・法・伊・巻・戊・葦）

＊『白氏文集』巻三「昆明春水満」、「鋪」。

⑨559山路日暮|満耳者樵鰕得哥牧笛之聲澗戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色（久）

〈同〉暮（下[25]・山）

〈異〉落（雲・関・粘・近・伊・巻・多・戊・葦）

＊『本朝文粋[26]』巻十「暮春遊覧同賦遂処花皆好　紀斉名」、「暮」。

⑩619蕙帯蘿衣抽簪於北山之北蘭橈桂鼓|棹於東海之東（久）

〈同〉棹（安）

〈異〉舷（雲・関・粘・伊・戊・葦）

舳（山・多）

船（巻）

＊『本朝文粋』巻十「暮春同賦落花乱舞衣各分一字応太上皇製」、「舳」。

⑪673いかるかやとみのをかはのたえはこそわかおほきみのみなはわすれめ（久）

〈同〉いかるかや（山）

〈異〉いかるかの（雲・関・粘・近・伊・巻・太・多・戊・葦）

＊『拾遺集』1351、「いかるかや」。

⑫685隴山雲暗李将軍之在家潁水波|閑蔡征虜之未仕（久）

〈同〉波（多）

〈異〉浪（雲・関・粘・近・伊・安・巻・太・戊・葦）

＊『本朝文粋』巻五「為清慎公請罷左近衛大将状」、「波」。

⑬753翫其磧礫不窺玉渕者曷知驪龍之蟠習其弊邑不視上邦者未知英雄之所踵（久）

〈同〉　踵（山）

〈異〉　宿（雲・関・粘・近・伊・安・巻・太・多・戊・葦）

＊『文選』巻五、「躔」。

⑭774佳辰令月歓無極万歳千秋楽未央（久）

〈同〉　佳（巻）

〈異〉　嘉（雲・関・粘・近・伊・安・太・益・山・戊・葦）

＊『江談抄』[27]第四、「佳」。

ここから、久松切は、安宅切・巻子本・下絵切・山城切・多賀切[28]・戊辰切[29]・葦手本など、十二世紀の書写とされている諸伝本と広く連関していることが知られる。また、その中には校訂が行われていた跡が窺われる本文・注記が存する。本書（第三章）中、指摘したごとく、十二世紀には既に典拠の調査が行われていたものとみられる。

なお、堀部正二氏は、山城切の本文について論じられた際、右掲の用例のうち、⑧⑨⑪⑬について、「平安朝後期より漸次變形轉訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌を示す」[30]と指摘されたが、右掲の久松切の本文を後代の『和漢朗詠集』七本（尊経閣文庫蔵本[31]・専修大学附属図書館蔵本[32]・某氏蔵本〈日本古典文学刊行会〉[33]・天理大学附属天理図書館蔵本[34]・墨流本[35]・陽明文庫蔵本[36]・国立国会図書館蔵本[37]）の本文と対校してみると、一致する部分が数々認められ[38]、久松切に存する本文の流れが後代に及んでいることが知られる。諸伝本間における久松切の位置、及び後代の伝本の性格について検討する上でその点も重視されるべきであろう。

以上、久松切では、粘葉本類との同文率が高く、久松切と粘葉本類とは特異な本文をも共有していたが、雲紙本類の本文をも有していることが確認された。また、久松切と同時代の書写とされている十二世紀書写本との連関性も認められた。そ

のうちの安宅切・巻子本・葦手本・山城切は、本書[39]中、述べたごとく、雲紙本類よりの本文を包含している。どちらかといえば粘葉本類よりに位置する久松切とはこの点において一線を画するものであり、久松切は、異なる類の諸伝本とも広く連関しているということが明らかとなった。また、久松切と十二世紀書写本との同文例からは他文献との接触が推され、また、それらの本文が後代へ及んでいる事実も注目される。

六

注記においても久松切と十二世紀書写本群との間には同一例が認められ[40]、また、他文献との照合の跡が窺い知られる。それは、和歌よりも漢詩（題詞などの付加）に顕著に見られる。豊富な注記を有する伝本には久松切・山城切・多賀切[41]が挙げられるが、とりわけ久松切では次に例示するごとく、研究的要素が濃厚である。

以下、久松切独自の注記を挙げ、次いで、諸伝本の注記を載せ、その注記を有する諸伝本の略号を括弧内に示す。

①539見故敦忠卿小野山庄花 一条摂政（久）

故権中納言小の庄山一条攝政（雲）

故権中納言小野山庄一条摂政（関）

ナシ（粘・近・法・伊）

故権中納言小野山庄花 一条■[42]（山）

故中納言小野山庄花一条摂政（多）

『拾遺集』1279。雲紙本などの「故権中納言」は久松切に注されるごとく藤原敦忠のことを指す。

②619落花乱舞衣 江相公（久）

江相公（雲・関・粘・伊・安・山・葦）

落花乱帯衣 江相公（多）
江（戊）

『本朝文粋』巻十、「暮春同賦落花乱舞衣各分一字応　太上皇製」。久松切の注記が正確であり、多賀切の「落花乱帯衣」は誤写かと思われる。

③640餞源實赴鎮西 遊女白女（久）
遊女白目（雲・関・山）
ナシ（粘・近・伊）
遊女白女（益・多・戊・葦）

『古今集』387。「源のさねかつくしへゆあみむとてまかりけるに、山ざきにてわかれをしみける所にてよめる　しろめ」とあり、久松切ではこの詞書を簡潔に注している。

④720見遊女 以言（久）
遊女序 言（山）
遊女序 以言（多）
以言（雲・関・粘・近・伊・安・太・戊・葦）
ナシ（雲切）

『本朝文粋』巻九、「見遊女」。

平安時代書写本では唐人の賦句への言及はあまりみられない。[43] しかし、久松切独自の注記にはそれも確認される（4「白西府池」・403「愁賦　張讀」・416「暁賦」・472「元　贈薛濤」・510「暁賦　謝賦」・604「閑賦　張讀」・614「閑賦　張讀」・615「皇女賦　康條」・657「上春詞　揚衡」・706「張文成　遊仙窟」など）。

なお、久松切の注記では次のごとく粘葉本・伊予切と一致する箇所も中にはある。

(1)
210紀（久・粘・戊・葦）
已上白（雲・関）
已上白 異本■（山）
立秋後作 紀田忠臣（多）

(2)
427源宗于（久・粘・伊・法・益）
源致行（雲・関・戊・葦）
源敏行（山）
源宗行（太）

しかし、全体を通してみると雲紙本・関戸本との一致の方が多いものである。事例をいくつか挙げる。

(3)
211安貴皇子（久・雲・関・山・葦）
志貴皇子（粘）
ナシ（伊）
志貴王子（多）
安藝大君（戊）

(4)
226田達音（久）
田（雲・関・山・葦）
白（粘・伊）
ナシ（戊・伊和）

(5)442忠見（久・雲・関・葦・戊）
　忠岑（粘・法）
　ナシ（伊）
　重之（山）
(6)595野（久・戊・葦）
　右丞相亭法花会　野（雲）
　右丞相花亭法花会　野（関）
　都（粘・伊・近）
　右丞相■亭法花　野（山）
(7)717内教坊老命婦　江相公（久）
　江（雲・戊）
　内教坊老命婦　江（関・安）
　内教■命婦（山）
　紀（粘・伊・近）

右の事例のごとく、注記において雲紙本類と粘葉本類との間に異同がある場合、久松切は雲紙本類に近い傾向にある。

ただし、久松切には、次の用例のごとく、雲紙本類に無い詩歌句の注記も見られる。

①321田達音（久・戊）
　田（行大・唐2）
　菅（粘・伊）

白　或本■（山）

秋暮傍山行　田達音（多）

②603講師贈菩提子念殊　左相府（久）

左相府（粘・近・伊・大内）

讀法文了贈■子念珠　左■（山）

右の①②は粘葉本類に存しているが雲紙本類には詩歌句そのものが存しない。

①の粘葉本・伊予切では「菅」とあるが、本作品は『田氏家集』にも所収されている。久松切・戊辰切・多賀切では「田達音」（伝行成筆大字切・唐紙切2では「田」）などと注する。また、②についても、作者名「左相府」のみが注されている粘葉本類に久松切ではさらに題詞が付されている。

以上、久松切・十二世紀書写本では、注記においても同一例が認められ、注記からも他文献との照合のあとが看取された。殊に久松切では、邦人の作品に止まらず、他本では見られない唐人の賦句への言及もあり、且つ詳細であった。

通時的流れにおいては、久松切の注記は雲紙本類よりではあるが、雲紙本類に無い詩歌句の注記をも有しており、その追補された形態のうちに当時の研究的視点を窺うことができる。

七

以上の考察結果を纏めるならば次の四点となる。

(1)　久松切は、十一世紀中葉の書写と推定されている粘葉本類・雲紙本類には無い詩歌句を全て有している。

(2)　久松切独自の排列の揺れ、及び、巻上・春部巻末の三詩歌群の排列（巻頭の内題の次に存する題の一覧による）からは久松切は、雲紙本類の系譜上に位置すると思われる。

(3)　久松切は、粘葉本類との同文率が高く、特異な本文を共有しているものの、雲紙本系の本文をも有している。また、久松切と同時代の十二世紀書写と推定されている、雲紙本類の系譜上に位置すると思われる諸伝本とも広く連関性を有し、かつ、その同文例からは他文献との接触が行われていたことが推される。

(4)　注記においても、久松切と十二世紀書写本群との一致、及び他文献との接触が認められる。平安時代後期書写本における注記の内容的深化が看取されたが、ことに久松切では研究的要素が濃厚である。

久松切の注記は、雲紙本類の流れを汲むものと思われるが、雲紙本類に無い詩歌句の注記をも有しており、追補された形態であるといえる。

右の(2)・(4)から、久松切は、形態的な面においては、基本は雲紙本類の系譜上にあることが推測され、また、(1)・(3)・(4)からは、粘葉本類、及びその他、異なる性格の『和漢朗詠集』諸伝本、他文献からも様々な要素を摂取したものと思われる。従って、久松切は、久曽神氏の分類の「再稿本」[44]には位置付けがたく思われる。むしろ、基盤を成す部分は雲紙本類であり、そこに粘葉本類、及びその他の要素が混じた集成本的性格を有すると考えられる。著者の見る限りでは、後代の『和漢朗詠集』諸伝本では（『和漢朗詠集私注』も）いずれも、粘葉本類・雲紙本類の形態を特徴づけているといえる、巻上・春部巻末の三詩歌群の排列は、雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であり、粘葉本・雲紙本両類の本文を併存している。また、平安時代書写本においては異質な後代的要素[45]が久松切には及んでおり、集成的である。久松切は、『和漢朗詠集』流布本の源流をなす一伝本として位置付け得るものと考えられる。その点は、本書（第三章第五節）中、述べたごとく、戊辰切と共通しているといえる。

ただし、久松切は平安時代書写本の中では後代的色彩が強く見られる一方、十一世紀中葉の書写とされる伝藤原行成筆大字切との共通要素も有している。その点は次節（第十節）において論じる。

注

(1) 春名好重氏編著『古筆大辞典』[昭和54年 淡交社] 916頁

(2) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三巻 [平成2年 講談社] 427頁

(3) 前掲（注1）に同。917頁

(4) 前掲（注2）に同。426頁

(5) 堀部正二氏著『校異和漢朗詠集』[昭和56年 大学堂書店] 312頁

(6) 久曽神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』[昭和55年 ひたく書房] 214頁

(7) 「荻原安之助が分断に際して、原本の形態を後世に残すべく、私家版として限定印刷をしたもの」（前掲〈注2〉に同。425頁）。

(8) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは796の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

(9) 前掲（注2）に同。302・303頁

(10) 515を含む一紙の横の長さは四七・三cm、その近辺の一紙の横の長さは五一・五cm前後で、515を含む一紙の横の長さは他の料紙に較べて短い。515と517の間には紙継ぎの跡が見られることから、原姿では516は515の次行に位置していたが切り取られた可能性も考えられる。

(11) 久松切と「あまり距たらない時代の老齢の人の手によって加えられたことを想わせる」とされている。前掲（注2）に同。428頁

(12) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676 倭漢朗詠集』[昭和14年 岩波書店] 13～15頁

(13) 226・227、268～271、557～560、574～576、607～609、615～622、626～629、632～636、655・656、671・672、686・687、726～728、746・747、754～756。

(14) 626を含む断簡一葉と627・628・629の一葉、計二葉。

(15) 粘葉本類では「藤」・「躑躅」・「款冬」の順。

(16) 133～135の三首〈「躑躅」の部分〉一葉と137～139の三首〈「藤」の部分〉一葉、計二葉。
(17) 宮内廳書陵部編『圖書寮叢刊』[昭和42年　養徳社] に拠る。
(18) 久松潜一氏校『公任歌論集』第四九冊 [昭和26年　古典文庫] に拠る。
(19) 西下経一氏編『古今集校本』[昭和52年　笠間書院] に拠る。
(20) 片桐洋一氏編『拾遺抄―校本と研究―』[昭和52年　大学堂書店] に拠る。
(21) 片桐洋一氏著『拾遺和歌集の研究〔伝本・校本篇〕』[昭和55年　大学堂書店] に拠る。
(22) 平岡武夫・今井清氏編『白氏文集歌詩索引下冊（全三冊）』[昭和64年　同朋社] に拠る。
(23) 古谷稔氏監修『古筆手鑑　披香殿』[平成11年　淡交社] に拠る。
(24) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』72 [昭和41年　岩波書店] に拠る。
(25) 古筆学研究所編『過眼墨宝撰集』1 [昭和62年　旺文社] に拠る。
(26) 大曾根章介氏ほか校注『新日本古典文学大系』27 [平成4年　岩波書店] に拠る。
(27) 甲田利雄氏著『校本江談抄とその研究』上巻 [昭和62年　続群書類従完成会] に拠る。
(28) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四巻 [平成2年　講談社] 339・351・370・384頁
(29) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻 [平成2年　講談社] 348頁
(30) 前掲（注5）に同。49頁
(31) 伝二條為氏筆。巻上・下、二軸。原本に拠り調査を行った。
(32) 中田武司氏解題『専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊　和漢朗詠集二帖』[昭和56年　専修大学出版局] に拠る。
(33) 日本古典文学会監修・編集『復刻日本古典文学館　第一期和漢朗詠集上巻』[昭和50年　日本古典文学刊行会] に拠る。
(34) 杤尾武氏著『貞和本和漢朗詠集』[平成5年　臨川書店] に拠る。

(35) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』14［平成2年 二玄社］に拠る。

(36) 片桐洋一氏解説『陽明叢書 国書篇』第七輯［昭和53年 思文閣出版］に拠る。

(37) 朽尾武氏編『国立国会図書館蔵和漢朗詠集 内閣文庫蔵和漢朗詠集私注漢字総索引』［昭和60年 新典社］に拠る。

(38) ①専修大学附属図書館蔵本・某氏蔵本〈日本古典文学刊行会〉・天理大学附属天理図書館蔵本・陽明文庫蔵本、「あひにけるかな」。国立国会図書館蔵本、「あふそうれしき」の二字目以下「ふそうれしき」の二字目以下「ふそうれしき」に傍書「ヒニケルカナ」。

②尊経閣文庫蔵本・某氏蔵本〈日本古典文学刊行会〉・墨流本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「駐」。専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本、「住」に傍書「駐」。

③陽明文庫蔵本、「看」。

④尊経閣文庫蔵本・某氏蔵本〈日本古典文学刊行会〉、「あひみるあきの」。国立国会図書館蔵本、「あひ見る秋は」の「る」以下に、傍書「イる秋の」。

⑤某氏蔵本〈日本古典文学刊行会〉、「居」。

⑥陽明文庫蔵本、「最」。国立国会図書館蔵本、「最」に傍書「白尤」。

⑦陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「頻」。尊経閣文庫蔵本、「連」に傍書「頻」。

⑧尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「鋪」。

⑨尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「暮」。

⑩天理大学附属天理図書館蔵本、「棹」。国立国会図書館蔵本、「舷」に傍書「棹」。

⑪尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「いかるかや」。

⑫尊経閣文庫蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本、「波」。

⑬尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本、「踵」。国立国会図書館蔵本、「宿」に傍書「踵」。

⑭天理大学附属天理図書館蔵本、「嘉」に傍書「佳」。

(39) 第三章（第一節・第二節・第三節・第八節）所収

(40) 31・41・89・108・109・119・122・138・200・232・300・363・371・397・431・433・457・479・494・539・628・648・661など。

(41) 山城切、41・89・108・109・119・200・232・300・397・433・457など。多賀切、89・108・457・494・539・628など。

(42) 山城切には裁断に因る不明箇所がある。当該箇所については■で示す。以下、同。

(43) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』［平成7年　勉誠社］144・145頁

(44) 前掲（注6）に同。

(45) 本書（第三章 第五節）中、指摘した。

［謝辞］

資料の調査にあたり、笠嶋忠幸氏（出光美術館）にご高配賜りました。厚く御礼申し上げます。